

はじめに

普通、最後の言葉とか臨終の言葉とかいうのは、その人物が「死に面して発する言葉」の意味だ。しかしその人間にとって、果たして死に面した時の言葉が本当に後の世や周りの人に伝えたかった言葉だろうか、という疑問をずっと抱いている。場合によっては、死ぬかなり前に自分では「これで自分は終わりだ」と観念する時があるのではないだろうか。そうなる、そういう自分の生に一応決着をつけた時に発する言葉が、その人間にとって本当の意味での「最後の言葉」になるのではないかと思っている。

この本に集めたのは、そういう意味も兼ねている。必ずしも死に面して発した言葉だけではない。歴史的に見て、「この人は、この時にこの世における生を終わっているのではないか」と考えられる場合は、その時に発した言葉を「その人間にとっての最後の言葉」として扱っている。だから人物によっては、何度もそういう経験をすることがある。つまり、

「自分はここで終わりだ」とか、

「自分はこの段階で、やりたいことをやり遂げた」

と認識する時に発した言葉も、そういう意味では収録している。言葉を変えれば最後の言葉というのは、その人間にとっての肉体的な終わりに臨んで、それに精神的なものを加えて、つまり「心身共に」この世に別れを告げる時のいわばその人間にとってのしめくくりの言葉だと思う。ではそのしめくくりの時期をいつに設定するかということは、その人間個人個人の考えであって、計り知れない。それを、後世に生まれたわたしが、

「多分、この時だったのではないか」

という、余計なお節介を焼きながらその時に発した言葉をご紹介したいということだ。何のためにそんなことをするかといえば、普通最後の言葉とか臨終の言葉というのは一種の悲愴感を伴う。つまり死を前にした人間の発する言葉だから、よく言われるように「ホトトギスの死ぬ時に発する鳴き声」になぞらえて、どこか悲愴感が漂い、哀しさを伴う。が、わたしが今回集めたのはそういう意味ではない。むしろ逆だ。逆というの

は、

「その人間が、ギリギリの段階で発した言葉を、まだ生き抜かなければならないわたしたちが、参考にし、励ましとし、勇気づけにしたい」

という意図を持っているからである。人間死ぬ時に発する言葉はギリギリな状況からのもので、嘘偽りはない。その言葉はその人間の真実そのものだ。その真実に接して、さらに生き抜かなければならないわたしたちの「励ましや勇気づけ」にしたいと考えたのである。そういう観点から、ここに収録された言葉を味わっていただければこんな嬉しいことはない。

童門冬二

最後の言葉

● 目次

はじめに 3

第1章 二宮金次郎（尊徳） 11

第2章 辞世のお手本（心揺さぶる和歌調の辞世） 17

・ 西行法師・在原業平・浅野内匠頭長矩・吉田松陰

第3章 英雄英傑の辞世（戦国時代の辞世） 39

・ 織田信長・上杉謙信・豊臣秀吉・伊達政宗・徳川家康

・ 柴田勝家・お市・別所長治・清水宗治

・ 千利休・陶晴賢・石田三成・大谷吉継・平塚為広

・ 佐々成政・太田道灌・足利義輝・三好長治

・ 山中鹿介・北条氏政・氏直・細川ガラシヤ

第4章 江戸文化の辞世 ……………

・貝原益軒・小林一茶・良寛

・由井正雪・為永春水・式亭三馬・十返舎一九・鼠小僧次郎吉

・五代目市川團十郎・三代目尾上菊五郎・上田秋成・堀越左源次・元全網

・庭訓舎綾人・手柄岡持・歌川豊春・安藤広重・山東京伝

・一本亭芙蓉花・白鯉館卯雲・伊勢貞丈・恋川春町・天野広丸

・大田南畝・柳亭種彦・朱楽菅江・横川良助

・大原幽学・渡辺崋山・河合寸翁・平田鞠負

・近松門左衛門・尾形乾山・小西来山・松尾芭蕉・斯波園女・宮川松堅

・春日局・小堀遠州・後水尾天皇・和子

おわりに ……………

第1章 二宮金次郎（尊徳）

一「予が足を開け、予が手を開け、予が書簡を見よ、予が日記を見よ。戦々競々深淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如し」

これは二宮金次郎が安政二（一八五五）年の十二月三十一日に自分の日記に書いた言葉だ。金次郎は翌安政三（一八五六）年十月二十日の午前十時ごろに死んだ。大勢の弟子たちに囲まれていたという。この時金次郎は口述で弟子に日記を書かせた。その文が、
二「疾病に臥す。門弟子を呼んで曰く、鳥のまさに死なんとする、その鳴き声や哀し。人のまさに死なんとする、その言や善し。慎め哉、小子。速かならんと欲すること勿れ。速かならんと欲すれば大事を乱る。勤めよや小子、倦むこと勿れ」

また門人である相馬藩士伊東発身は、

「先生の遺訓だ」と言つて、次のように書いています。

三「予が死近きにあるべし。予を葬るに分を越ゆる事勿れ、墓石を立る事勿れ、碑を立てる事勿れ。只土を盛り上げて其傍に松か杉を一本植置けば夫にてよろし」

普通わたわた死に面した時の言葉を遺言とし、臨終の言葉とするとところだが、わたし

は「はじめに」に書いたように、その人間にとつて、「精神的な死を迎えた時の言葉」を、この本の趣旨に則った「最後の言葉」と思いたいので、やはり最初に書いた「予が足を開け……」という文章を二宮金次郎の最後の言葉として考えたい。というのは、この言葉を告げた安政二年の十一月に、金次郎は日光門跡宮から羽二重二疋を戴いた。普通なら、感激のため涙にむせんでその感動を日記に記するだろうが、金次郎はそうはしなかった。ここに紹介した「予が足を開け……」という、凄まじい気迫に満ちた言葉を告げたのである。

金次郎は、よく知られているように小田原藩主大久保忠実の命によつて、大久保家の分家である下野（栃木県）桜町の、荒廃した村落を復興することを命ぜられた。ここから金次郎の有名な「報徳仕法」が展開される。しかし、金次郎は単なる農業改革者ではなく、思想家でもあった。そのため、改革手法に思想性を織り込んだ。思想といつても難しいことではない。「人間として当然やらなければいけないこと」を、やってほしいと農民たちに語り掛けたのである。が、すぐソロバン勘定に走る人々はそれが理解できなかった。金次郎は苛立った。そのため突然、ある日村から失踪し、千葉県の成田不動

尊に参籠してしまった。この時成田不動尊の和尚から、

「不動明王の存在意義」について教えられた。不動明王は背中に凄まじい炎を背負っている。和尚は、

「あれは不動明王の社会悪に対する怒りであり、その社会悪を自分の手で肅清し、苦しんでいる人々を救おうという念願の現れだ」と告げた。金次郎はこれを聞いて発奮した。そして、

「自分も農村の不動明王になろう」と決意した。

この悟りを開いた金次郎は再び桜町に戻ってくる。だから、ここに掲げた「予が足を開け……」の言葉は、彼にすれば不動明王になったつもり自身の自身真実を吐露したものである。それが、過去との決別であり、同時に明日からの新しい出発である意志を示している。以後の金次郎の行動は、この言葉の通り展開されてゆく。別に紹介した二つの言葉は、いつてみればありきたりで誰でもが発する言葉だと思う。しかし、金次郎の金次郎たる所以はやはりこの「予が足を開け……」に尽きているような気がする。あるいはその裏には、

「なかなか自分の理想を理解してくれない農民たちへの怒り」が込められていたかもしれない。同じことは今の世の中にもたくさんある。つまりどんなに理想を掲げ、自分の心身を事業に捧げても、周囲はなかなか理解してくれない。苛立つ。腹が立つ。しかしそれを超えて根気強く仕事を推し進めなければ、結局は元の木阿弥になってしまう。そこに金次郎が唱えていた、

「積小為大」の考えが作用してくるのだ。どんな大きな事業を成し遂げるにも、やはり今自分がいる場所で、今与えられた仕事をこつこつと小さな石を積み上げるように努力していかなければ、大きな事業に到達できないということである。

童門冬二（どうもん ふゆじ）

1927年東京生まれ。海軍土浦航空隊に入隊するが翌年終戦。終戦後、東京都庁に勤務。東京都立大学事務長、東京都広報室長、企画調整局長、政策室長等を歴任。在職中の1960年『暗い川が手を叩く』が第43回芥川賞候補となる。1979年51歳にして退職、作家活動に専念。56歳の時『小説 上杉鷹山』がベストセラーとなる。その後も、多数の書籍を著わし、現在も、執筆、講演と活躍中。

1999年春勲三等瑞宝章を受章

日本文藝家協会会員

日本推理作家協会会員

経法ビジネス新書 008

最後の言葉

2015年10月10日初版第1刷発行

著 者

童門冬二

発 行 者

金子幸司

発 行 所

株式会社 経済法令研究会

〒162-8421 東京都新宿区市谷本村町3-21

Tel 03-3267-4811

<http://www.khk.co.jp/>

企画・制作

経法ビジネス出版株式会社

Tel 03-3267-4897

カバ
ー
デザイン

株式会社 キュービスト

帯デザイン

佐藤 修

印 刷 所

日本ハイコム株式会社

乱丁・落丁はお取替えいたします。

©Domon Fuyuji 2015 Printed in Japan

ISBN978-4-7668-4806-9 C0295